
僕の弟

森本 織部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の弟

【Nコード】

N8570F

【作者名】

森本 織部

【あらすじ】

わが弟の失敗談。どんな時でも我が道を行く弟に幸あれ！

はじめに

僕の家族には、ドジで格好のいい弟がいる。

彼は小さい頃から色々とやらかしてくれた。失敗の数だけならば、僕だって負けはしない。しかし、彼の失敗は笑えるのだ。もしかしたら、笑っているのは僕だけかもしれない。とりあえず、彼の失敗談を書いていきたいと思う。

はじめに（後書き）

ムキになる弟と僕

今でこそ、ハンサムで私をも超える身長を獲得した弟だが、十年前は私の方が背が高かった。

小学校低学年の夏休みの時だった。

その当時、家族で母方の祖父と祖母の家に帰省していた。そこで、いつものように祖父の犬を母と僕、そして弟で散歩する。そして帰り道で弟と僕は、喧嘩をしていた。帰り道の方が食い違ったのだ。気が付くとお互いムキになっていた。

「こっちだよ！」

顔を赤く染め、汗を顔に張り付けながら弟は力説する。その人差し指は右の道を指差している。

「ぎゃくだよ！」

僕も負けじと顔を赤くし、ムキになって言い返す。もちろん僕の指は左の道を指差している。

「……、まあ好きにしたら。」

母はどうでも良いとばかりに言い放った。

僕と弟は散々言い争った。結果、ジャンケンで帰り道を決めることになった。

「「じゃんけん、ぽん！」」

僕はじゃんけんに負けた。

「しらないからな！」

僕は捨て台詞を吐いた。母はこれらの行動に呆れていた。

それから、弟はずんずん右の道を突き進んでいった。しかし、全然家に辿りつかない。夕日の光はなりを潜めて夜の帳を降ろしてきた。

「なんでつかないの！」

弟は逆ギレをかました。

結局、帰りは遅くなった。弟は無然としながら、なぜ帰り道が変わってしまったのかを悩んでいた。

何年かのちに、彼は自分が方向音痴だと自覚するようになった。弟は転校した小学校でも中学校でも必ず通学路で迷うという珍事を引き起こすからだ。

ムキになる弟と僕（後書き）

次回は弟が十五の夜に家出した時の話をしたいと思います。

十五の夜(1) (前書き)

十五の夜（1）

十五の春。普通の日本人なら中学生だ。甘酸っぱい思い出の一つや二つは誰もが持っているだろう。もちろん弟にだって……。

五月だというのに融け残った残雪が積み上がっている運動場。それらは埃で汚れて醜いはずだった。

しかし、夕日が黒い残雪すらも赤く染めてしまった。それを眺めているのは一人だけだ。その眼は食い入るように誰もいない運動場を見ている。

そんな運動場が見える教室の一室に生徒が二人。

一人は運動場を眺めている男子生徒。背が平均より高くすらつとしている。そして顔立ちもすっきりしており、スポーツ刈りの髪形も相あまって爽やかな印象の少年だ。

すこし学生服を崩して着ている。その目はどこも見てはいなかったが、力強かった。

もう一人は、身長は平均。顔はお世辞にも美人とは言えない。何とか「可愛い」の部類に入る女子だ。

そんな彼女はセーラー服のスカートを流行に合わせて短くしていた。この女子は教室に入って来たばかりらしく男子生徒を見つけて彼に声をかけた。彼女は彼の振り返った顔を見て少し驚いた。

自分呼び出した彼の存在に。彼に呼び出されるとは思ってもいなかったのだ。

彼はゆっくりと窓から顔を離し、彼女に向き直る。

教室には二人きり。赤い夕陽のみが唯一の光源。二人とも赤く染

められている。

彼は彼女に対して思いの丈を打ち明けた。彼は多少の自信があった。

しかし結果は惨敗だった。彼女の望みは高かった。彼女は学年のスターだった。彼は最初から相手にはされていなかったのだ。

彼の精神はコテンパンにされた。

さらに、追い打ちをかけるようにクラスでは彼に関する噂が立ち。最近、たるんでいると両親に叱られた。

この後、あなたならどうしますか？ふて寝をしますか、やけ食いですか、泣きますか、それとも友達に泣きつきますか？

弟はどれもしなかった。

弟は消えた。手紙も、電話も、もちろんメールもなし。五月中旬に突然姿をくらましてしまった。

十五の夜（2）

家出された当日。

午後十時になっても、弟は帰ってこなかった。僕を含めて帰ってこない弟に家族は怒っていた。

午後十二時。僕らは心配になりだした。不安を抱えたまま就寝した。

弟は帰ってこなかった。

翌日の朝のひとコマ。

寝付けないかと思っていたが、意外と寝つけた。しかし、気分はどんより重い。居間に通じる扉まで重く感じる。両親はすでに起きていた。父は背広、母はいつもの服装にエプロンだ。

おはよう。

「おはよう……。」

返してくれたのは母だけだった。わずかな期待をもって弟の部屋をのぞく。空っぽだった。

帰ってこなかったのか。

「帰ってこなかったの。」

母さんが言った。父さんは無言だった。

私はいつもより丁寧に顔を洗い朝食を食べる。トーストとジャムだけの朝食を。味気ないとは思えない。これだけでも今の胃には重い。

「お父さん、会社は。」

母が尋ねる。

「休む。このあと警察に届けるから。」

父が力なく返す。

二人のやり取りは見ていて余計に気持ちが沈んだ。弟は無事なの

だろうか？

まあ、今は学校に行こう。僕にできることは無さそうだし、待つ以外。

そういえば。母さん弁当あるの？

「お父さんから、お金もらって（それで買って）ちょうだい。」
わかった。父さん、弁当代をください。

「ああ。」

父は財布から手元をろくすっぽも見ずに一枚の札を渡してきた。
一万円だった。

私は無言で受け取った。

いろいろとだめだと思った。

学校でのひとコマ。

いつも以上に私は変だったらしい。この日のことはあまり覚えていない。

たしか、友人からこんなことを言われた。

「オリ、なんか今日はいつも以上におかしいよ？」

ひどいなあ。確かに僕は変人だけどそんなこと言わなくなっちゃったっていいじゃないか。と言いたいが、生返事だけ返しておく。

「やっぱり、変だよ。いつもはもっと面白く反論するのに。」

友人よ。僕の評価はどうなっているんだい？

学校から帰宅したときのひとコマ。

いつもより早く家に帰る。家の扉を開けるとドラマの光景が広がっていた。

「それで、息子さんの荷物がなくなっていたんですね。それじゃあ次に、所持金は（以下略）。」

居間で事情聴取よろしく屈強そうな私服の刑事さん達、それに一部だが制服警官が居間のちゃぶ台で父母と向き合っている。

これ何てドラマ？

まあ、いいや、取りあえず「ただいま」。

「お帰りなさい。」

「お帰り。」

両親は二人とも返事をしてくれた。警察の方々に腰を折って一礼した。

それが終わるやいなや、私は自室に引っ込んだ。

ついに警察まで来たか。なんだか笑いたくなかった。

夜になり、私は早々と布団に潜り込んだ。この日も意外と寝れた。

次の日。

そして気持が地面にめり込むような朝をもう一回迎えて学校に行った。

そして、学校から帰ってきたら弟が帰宅していた。

いつも通りに帰宅の挨拶をしようとした。結局出来なかったが。

ただい、あ！……。

「もぐもぐ（食事中）。」

弟はいつも通りに居間で飯を食っていた。私は一瞬ではあったが、口をあんぐり開けているしかなかった。

弟は僕のことを不思議そうに見つめていた。

十五の夜(2) (後書き)

更新が滞ってしまいませんでした。次回からはもっと早く更新します。

十五の夜（3）

家に帰ると、騒ぎの張本人が飯を食っている。

しかも、普通に「お帰り。」と返してくる。弟の髪が脂っぽくなつてなければ家出をしていたようには見えない。

ちよつと待て！何でいるの……。

弟がすました顔を僕に向けている。

「帰ってきたから。」

至極当然と言わんばかりに弟が返してきた。

学生服も脱がずに僕は、弟から家出中の話を聞いた。

二日間、弟は支笏湖を目指して自転車をこいでいたそうだ。

しかし、千五百円の所持金は食費としてすぐに消えてしまい。一日目の夕飯からは野生のフキや土筆をコンビニ弁当と合わせて食べていたそうだ。

ちよつと待て、フキには少量だが毒があつたはずだ。弟よ、体は大丈夫か？

「毒があつたんだ。苦かったけど大丈夫だったよ。」

………まあ、それならいい。それと、夜は冷え込んで眠れなかったとか。

そんなこんなで朝を迎えて、また自転車に乗った。

しかし空腹と睡眠不足で路肩に座り込んだきり動けなくなつてしまった。

人影もまばらな山の中の道路。車しか通らない。

そしたら彼の前に車が止まり、「家出かい？」と運転手が声をかけてくれたそうだ。

そして運転手さん、いや若いお兄さんは弟を保護し、家まで送り届けてくれたのだ。

お兄さん、ありがとう！

そして、両親はお兄さんと警察署にお礼を言いに行ってるのとことだった。

.....まあ、.....まあ、生きて帰ってきたからいいか。

父さんも母さんも心配してたぞ、手紙くらい残しといてくれよ。まったく犯罪に巻き込まれたかと思ったよ。

「え、二人とも心配してたの？」

.....

.....

.....。

おにいちゃん、かなしいよ。

「本当に、心配してたの？」

はい、そりゃもう前後不覚になるほど。

「ウソでしょ。」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....。まいった。

親の心も、兄弟の心も、よくわからないもんだと私は思いました。

このまま、終わると弟が親不孝者で終わってしまう。

なので少しでも、先生に説教されている弟を書いて、この話を終わりにします。

職員室。弟の担任の先生は放課後に、弟を呼びつけた。

先生「急にいなくなるから驚いたよ。」

弟「すいません。」

先生「何があったかは、話さなくてもいい。」

弟「?!」

先生「だけど、たくさんの人に迷惑と心配をかけたのを分かっているのかい？」

弟「わかっています。」

先生「本当に？あんまり、堂々としているから分かっていないように見えるけど。」

弟「先生や警察の人には迷惑をかけた思っています。」

先生「やっぱり分かってない。」

弟「そんなことはありません。」

先生「お前の親御さんが抜けているだろうが！」

弟「まさか、心配していたんですか。」

先生「子供のことを心配しない親がいるか!!」

弟「……。」

先生「お前の搜索届は誰が出した！学校に連絡してきたのは誰だ！頭を下げたのは誰だ！」

弟「先生たちじゃないんですか？」

先生「違う！全部、お前の親御さんだ。」

弟「……え。」

先生「帰ったら、謝るように。」

弟「…はい。」

二日後、弟は両親に謝った。

十五の夜（3）（後書き）

次回は、弟にせまる留年の危機。追い込まれた弟に神様は微笑んでくれるか？！

神様！お慈悲を！！（上）（前書き）

神様！お慈悲を！！（上）

弟は昔は勉強も出来ていた。しかし当時の弟には、その影はあまり残っていない。

そんな弟がやってくれました。

十二月の寒い冬のときだ。僕は大学受験が迫っていた。だから、弟には問題を起こして欲しくなかった。

その朝、布団の中で目が覚めると静かな緊張が扉の外から伝わってくる。何だ。寝ぼけた頭を覚醒させようと大きく息を吸い、吐き出す。息が部屋の寒さで白いモヤになる。

「あんた、あんなに遊んでいて今頃なの。」

「いやだから、……」

「あたし知らないから、自分で学校に連絡してよ。自分の責任でしよ。」

朝からどうしたんだ。まあ、いいや。何か学校行くとか行かないとか話してるし。声からして母と弟だろう。静かになったところを見計らって居間に行くかな。

よし静かになった。

おはよう。

「おはよう。」

母がやや無然としながら返事をしてくれた。腕組をし、椅子に腰かけている。その様子から、何かヤバイとを感じるものがあった。

今朝の言い争いは、一体どうしたの？

「ああ、それ。あの子ったら宿題が終わってないから学校休みたい、と言うの。」

へ？宿題ごときで？なんだそりゃ。

「ただの宿題じゃないの、進級に関わる宿題なの。」

……………！！！！！！！！！！ちよつと待って！

あの馬鹿、留年するなよとか思っていたけどついにやりやがった。やめてくれよ。あんな毎日遊び呆けていて大丈夫かなとは思ったけど、駄目だったか。

やばいじゃん！

「うん。」

母は大きく首を縦に振った。母の顔は渋い。

弟もさすがに年貢の納め時かな？しかし、まいったなあ。そしたら、さすがの弟も観念して学校に行ったかな。

「いま自分の部屋で寝てるの。」

んだそりゃ？確実に留年の道をたどっているぞ。

弟よ、どうしてそうなった。父の金で進学させてもらったのに何考えているんだ。留年するなよ。ストレートに卒業しようよ。

とか僕が考えている間に母は、出張でいない父の携帯に電話する。

何か空気が重たい。母の顔が曇っている。受話器から漏れ聞こえる低い声が怖い。父の声が地獄からの使者の声に聞こえる。

父は弟を電話越しに呼び出した。一通り父と話した弟は、電話を切った。

弟は顔を白くしながら、つぶやいた。

「殺される。」

僕は逃げるように登校した。

父が帰ってくるのはこの時点で二日後だった。

神様！お慈悲を！！（上）（後書き）

ちなみに、私は留年はしませんが不真面目な学生です。

神様！お慈悲を！！（下）

僕は弟の行く末を案じた。

逃げるように登校した、あの日。

学校でも考えてしまう弟の処遇。

進級に関わる宿題を出せない弟。

出さなかったら、どうなるか？

よくて、留年。悪けりゃ退学。どっちに転んでも最悪な状況の弟。

今、僕は地理の授業だが頭の中で父が怒鳴っている。

「誰が授業料払ってると思ってるんだ。」

怖い。帰って来ないで、父さん。

時間も容赦なく過ぎ。とうとう私は家に帰った。家の玄関が目の前にある。開けたくねえなあ。だが、しかし自分には、ここしか帰る場所がない。意を決して重たい扉を開けた。

…ただいま。あら、母さん意外と穏やかな顔して家計簿つけてい

るね。

「お帰り。」

弟は、いるよね。もしかして、さあ、……。

素っ気ない母の様子を見て、最悪の事態を想定してしまう。

「結局学校に行かなかったの。」

ああ、やっぱり。そうなってしまったか……。

「……。」

弟の宿題どうなったん？

この先は考えたくないなあ。

「出せなかったみたいよ。」

うわ！それじゃあ、……。

留年かな？終わった。弟、元気だな。

「それで今、宿題やってるの。」

????????? ちょっと待って、母さん。今なんて言った？

「今、宿題を片付けているの。」

なんで、今さら？提出日は今日でしょ？

「今日学校が休みになったの！」

!!!!!!!!!!!!!! なんで！だって今日は、平日ですよ！どうして！

？

満面の笑みを浮かべた母に、私は急いで質問をした。

「今日たまたま学校の暖房が壊れたの。」

……………。神様は弟を学校に行かせたかったんだな。

「あ、父さんと同じこと言ってる。」

マジ？で父さんは？どうせ、また電話したんでしょ？

「笑ってた。」

そう言う母も笑っていた。

詳しく話を聞いてみると、弟の学校では朝から学校のボイラーが故障し暖房がつかない。とかいう前代未聞な状況になったので、急ぎよ学校が休みになったとか。弟は運のいい人だ。神様がいるとし

たら感謝。

まあ、これで少しは懲りて勉強を……しなかった。また遊んでるし。おい、ニコニコで吹き替え版バイオばかり見てないで何かしろよ。

なに、大学行って英語の先生になりたい！
………神様、弟に何させたいんだか？
もう、強く生きて下さい、迷惑掛けずに。

余談

後日、弟の担任と弟の会話（弟談）

担「君、宿題はやってきたかい。」

弟「はい。」

担「昨日のうちにやってきたかい。」

弟「想像にお任せします。」

担「やってなかったね。」

弟「……。」

担「運のいい奴め。」

弟の進級は後日、無事に認可された。

神様！お慈悲を！！（下）（後書き）

弟が、大学受験をします。兄としては何も起こらないことを祈るのみです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8570f/>

僕の弟

2010年10月10日01時00分発行